

論文審査の結果の要旨

氏名 岡本 和子

ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin, 1892-1940) は、今日、多方面にわたって大きな影響を与えているドイツの批評家であるが、本論文は、<ベンヤミンの芸術批評思想の核心は芸術形式の理論にある>との基本的認識に立って、ベンヤミンの芸術作品をめぐる概念体系を明らかにしたうえで、彼の芸術形式の理論を解明しつつ、彼が「芸術作品は現存する必然性をもっている」という根本テーゼをどのように根拠づけているかを叙述したものである。

本論文は、「序」、本文二部、「結び」から成っている。論者は、まず「序」で立論を提示したのち、「第一部：言語・芸術作品・批評」において、主として『言語一般および人間の言語について』、『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』に基づき、ベンヤミンの芸術批評思想の根底をなす「言語」、「芸術作品」、「形式」、「批評」の概念を綿密に分析するとともに、それらの概念によって構成される連関を明らかにする。次いで、「第二部：芸術作品の形式」は、『物語作者』、『ドイツ悲劇の根源』、『ゲーテの「親和力」』を論述対象として、「物語」、「バロック悲劇」、「ロマン (長篇小説)」という芸術形式が、それぞれ、ベンヤミンの概念体系のなかでどのように「口承伝達」、「アレゴリー」、「象徴」という表現形式と結びつくことになるのかを克明に跡付け、それらの結びつきがそれぞれに「芸術作品が現存する必然性」を根拠づけるものとなっていることを説得的に論証してゆく。そして「結び」で論者は、ベンヤミンの批評が、「秘密の知」の住まう家としての芸術作品が「真理」の住まう家でもありうることを指し示すものであると述べ、「この二つの家が重なるところ、それが現存する必然性をもった<真の芸術作品>である」と締め括る。

本論文は構えが大きく、しかも分析と論証は緻密で、叙述も明晰である。先行研究も厳密に吟味されている。そのうえで本論文は、ベンヤミン研究に多くの新たな知見をもたらすとともに、従来のベンヤミン研究においては個別的に論じられることの多かった論点をも見事に関係づけ、ベンヤミンの芸術および芸術批評の理論をその本質に即して解明することに成功している。ベンヤミンが論じている他の芸術形式 (抒情詩、エッセイ、叙事演劇、複製芸術など) は本論文の枠組みのなかでどう扱いうるか、という点が今後の課題として残されているが、しかしこのことは、本論文が第一級のベンヤミン論であるという評価を損なうものではない。

以上により、本審査委員会は本論文が博士 (文学) の学位に値するものと判断する。